

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.145

2005年6月

特集  地球博
EXPO 2005 AICHI JAPAN



名大トピックス No.145

目次

●特集 愛・地球博	
愛知万博の特別展示物ユカギルマンモスの分子系統学的研究	4
小澤 智生 (大学院環境学研究科教授)	
21世紀のウォードの箱ーアラスカの植物を生きたまま日本へ運ぶ	6
伊藤 繁 (大学院理学研究科教授)	
ロボフェスタ2005とロボット大集合 大熊 繁 (大学院工学研究科教授)	7
ドライミスト冷却装置ーさらさら霧でひんやりとー	8
奥宮 正哉 (大学院環境学研究科教授)	
「光未来展」記念シンポジウムで赤崎特別教授が対談	9
地球平和シンポジウム開催ー中西国際開発研究科長はじめ多くの本学関係者が 参画ー	9
●ニュース	
平野総長が高麗大学100周年記念式典に招待される	10
名古屋大学全学同窓会韓国支部設立総会が開催される	11
名誉教授称号授与式・懇談会が開催される	12
文部科学省「大学国際戦略本部強化事業」に採択される	13
平成17年春の叙勲受章者決まる	13
近藤孝男理学研究科教授と二村雄次医学系研究科教授が中日文化賞を受賞	13
今年度の大学見学始まる	14
平成17年度科学研究費補助金の配分状況について	14
●知の未来へー若手研究者の紹介	
「百円しかない」を方言で?ー「しか」の動態に見る日本語の構造ー	15
宮地 朝子 (大学院文学研究科講師)	
●知の先端	
生理活性天然有機化合物が活性を発現する仕組み	16
磯部 稔 (大学院生命農学研究科教授/高等研究院流動教員)	
●地域にひらく	
社会との通路としての名古屋大学公開講座	18
戸田山 和久 (社会連携推進室長)	
●学生の元気	
航空部が新鋭グライダーの命名式を举行	19
漕艇部のボート艇庫兼宿所の改修及び増築が完了	20
米国国際開発庁局長代理の講演会開催	20
●回想ー新名誉教授のことば	21
●部局ニュース	
法学研究科が国立ソウル大学校法科大学と学術交流協定を締結	26
第3回坂田・早川記念レクチャー 記念講演会開催	26
名大物理 COE が東京で公開講演会を開催	27
動物ふれあい体験に300名が来場	28
高等教育研究センターがランチタイム FD を開催	28
中学生のためのネイチャーウォッチング開催	29
博物館第39回特別講演会開催	29
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年4月16日～5月15日	30
●INFORMATION	
万博記念国際フォーラム	32
第1回 AC21学生世界フォーラム2005	33
●イベントカレンダー	34
●ちょっと名大史	
第1回名大祭	36

特集

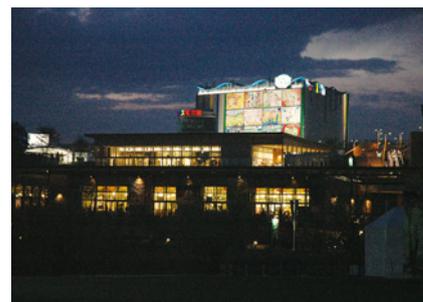
愛



地球博

EXPO 2005
AICHI JAPAN





2005年日本国際博覧会（「愛知万博」、「愛・地球博」）が、3月25日（金）から9月25日（日）の185日間、愛知県の長久手・瀬戸会場において、「自然の叡智 (Nature's Wisdom)」をテーマに開催されています。

本学でも、地元愛知県で開催される万博を記念して、万博記念国際フォーラム（32ページ参照）や第1回 AC21学生世界フォーラム2005（33ページ参照）等を開催し、また、本学の教職員も万博に様々な形で関わっています。

今回の特集「愛・地球博」では、研究面から万博に関わっている教員を中心に紹介します。





愛知万博の特別展示物ユカギルマンモスの分子系統学的研究

小澤 智生 大学院環境学研究科教授

愛知万博「愛・地球博」ではユカギルマンモスと命名された冷凍マンモスが特別展示されています。このマンモスを見学するため、連日多くの入場者がグローバルハウスを訪れています。

氷河期に繁栄を極めていたマンモスが短期間に絶滅した原因として気候の温暖化による環境の激変と人類による狩猟圧の増大やウイルス性疫病の伝染が指摘されています。地球環境と人類の将来を考えるうえで、マンモスの絶滅は我々に大きな教訓を与えてくれるという理由から、環境博ともいわれている愛知万博でマンモスが特別展示されることになりました。筆者はユカギルマンモスの国際共同研究プロジェクトでこのマンモスのDNA分析を担当していますが、同時に、万博でのマンモス展示・科学委員会委員も勤めさせていただいていますので、簡単に筆者のマンモス研究の概要を紹介します。

ユカギルマンモスについて

ユカギルマンモスは2002年にサハ共和国北部の北極海に面するユカギール村近郊で発見された約18,000年前のケナガマンモス (*Mammuthus primigenius*) の成獣個体です。この個体は頭部や左前肢に軟体部が非常に良い状態で保存され生息時の姿を留めているため、貴重な研究材料として、世界中の研究者から注目を浴びております。このマンモス個体から、これまでの研究では得られなかった軟体部の構造やDNA情報に関する重要な知見が多く得られるものと期待されています。

昨年11月にはヤクーツクでユカギルマンモスに関するキックオフ・シンポジウムが開かれました。愛知万博の期間中の6月18日と19日には、会場内で2回目の国際研究集会が20名を超す著名な外国人研究者が参加して開催され、マンモスの最新の研究成果が披露されます。



- | | | |
|---|---|---|
| 1 | 2 | 4 |
| | 3 | |
- 1 ヤクーツクの北方応用生態学研究所の cave 内でのユカギルマンモスの保存状況
 - 2 ユカギルマンモスのDNA分析用試料の採取（ヤクーツクの北方応用生態学研究所の cave 内の保存庫にて。奥で白衣姿で試料採取しているのが筆者）
 - 3 ユカギルマンモスの共同研究の調印式後に、サハ共和国第一副首相、教育文化大臣、科学アカデミーの2研究所の所長らが列席。中央が筆者。
 - 4 万博会場のマンモスラボに展示中のユカギルマンモス。大きな彎曲した牙と小さな耳が特徴。



© (財)2005年日本国際博覧会協会

ユカギルマンモスのDNA分析

マンモス、アフリカゾウ、アジアゾウの系統は共通の祖先から約700万年前にアフリカで短期間に分化したことが化石の記録から分かっています。マンモスがアフリカゾウ、アジアゾウのどちらに近縁なのかと言う命題は2世紀にわたり多くの古生物学者・動物学者・分子系統学者によってくり返し議論がされて来ましたが、現在でも、未解決の問題として残されてきています。この問題を解決するために

は、マンモスのミトコンドリアゲノムの全塩基配列（16,500塩基対を越すものと思われる）や核DNAの膨大な塩基配列データを読み取ることが求められています（ちなみにマンモスのミトコンドリアDNA約2,000塩基対がこれまで解読された最大の情報です）。ユカギルマンモスのミトコンドリアゲノムの塩基配列データの読み取りは現在順調に進行しており、6月の会議には、マンモスの系統問題に終止符を打つ発表を行いたいと考えています。



21世紀のウォードの箱—アラスカの植物を生きたまま日本へ運ぶ

愛知万博の「モノづくりランド シンフォニア」での展示→東山植物園

伊藤 繁 大学院理学研究科教授

「自然と環境との調和」がテーマの愛知万博に、「未来への夢」を展示したいとの夢が愛知のものづくり企業の人々の心にうまれました。その昔、南米からゴムの樹を、生かしたまま運び、やがて新しい産業を生んだ「ウォードの箱」のように、植物を運ぶ？夢は周り回って、植物の光合成のしくみや進化、人工光合成を研究する私のところまでできました。でも、「植物をとるだけでは、自然破壊？見るだけなら、テレビと同じ？」

可憐な北極のコケやアラスカンポピーに魅せられました。暗く長く-40度にもなる冬がすぎ、6月の光とともに芽を出し、白夜の短い夏の強い紫外線と急激な温度変化の中で、育ち、花をつける。1年でひと茎、10年でやっとひと株。日本だったらたちまち冷害で枯れるような環境の中で育つ植物の強さは魅力的でした。

「北極から日本まで1ヶ月間、植物を生かしたまま密閉箱の中で運び、極地での生存戦略のメカニズムを探り、利用する」という、宇宙旅行や、人工光合成にもつながるプロジェクトが始まりました。研究と「箱」のデザインは私たちが、植物採集は高知の「牧野植物園」、万博まで育てるのは大阪「この花咲くや館」、CO₂モニターや、燃料電池をつけ「箱」を実際に作り、コンテナを運ぶのは企業組、テレビ報道もまきました。

ぶっつけ本番に近い研究、採集、運送は大変でした。赤と青色の弱いLED光の下で1ヶ月も植物がもつのか？採集から展示まで8ヶ月、うまく生きているだろうか？

不安を抱えながら、2004年7月末アラスカ最北端パロウへ。持参した装置で光合成を測定。極地の植物は、過剰な光を熱に変える。このメカニズムを新型植物や、人工光合



- 1 アラスカンポピー
- 2 迫る北極圏の秋：アラスカパロウ北極海の流氷上にて。右が筆者。
- 3 21世紀ウォードの箱入りのコンテナとアラスカを走るトレーラ
- 4 周りを氷で満たした北極植物展示（中央球形）と21世紀ウォードの箱（右側）：万博長久手会場にて。6月6日より東山植物園にて展示中。

	2	4
1	3	



成に使いそう。採集後、バローからフェアバンクス、フェアバンクスからアンカレッジへと大型トレーラで輸送。トレーラが止まるたびに電源も切れるのが心配。輸出許可を

とり、水も補給出来ない1ヶ月の船旅。ひたすら無事をいのる。そして日本、通関にまた1週間。

9月、赤いLEDの光る密閉箱の中で、植物は皆無事。カンパニュラは新しいつぼみさえつけていました！50分のテレビ番組（テレビ愛知「葉、輝く～アラスカに探る未来エネルギー～」）は感動を伝え、「科学放送高柳記念賞奨励賞」、「文部科学大臣賞」をうけました。2005年3月末、万博。緑の植物たちは氷にとりまかれ、見る人達に北極の自然を伝えます。

イヌイットの人達は、「バローの植物を沢山の人にみてもらえるのはうれしい」といいました。「何人くらいの人が見るの?」、我々は「百万人、いや、千万人かもしれない」、「……」、「見るのはあなた一人でもいい。この植物たちが何万年の間伝えてきた、美しさや、勇気や、知恵をみてるのなら!」、温暖化で絶滅が懸念される小さな植物たちからの、未来へのメッセージ。（万博展示は4月末で終わり、6月から東山植物園にて展示を続けています。）

ロボフェスタ2005とロボット大集合

大熊 繁 大学院工学研究科教授

ロボットは、工場から家庭・オフィスへ活動の場を移しており、運動能力だけではなく、表情、音声、身振りを用いて感情を認識し表現する能力と、学習し創造する能力を必要としています。

大学院工学研究科電子情報システム専攻情報・通信分野の大熊研究室では、人間の音声、身振りから感情を読み取り、その感情を表現できるロボットの研究を進め、成果を挙げています。大熊研究室では、これらの研究成果をふまえて、ロボットを通じて科学技術の啓蒙活動を行う「ロボフェスタ」に参画してきました。

このたび、愛知万博開催にあわせて、これまでの実績をふまえた「ロボフェスタ2005」を開催することになり、7月と8月を中心に東海3県において、参加型のロボット制作、チュウトリアル及びロボコンを行い、そのまとめとして8月15日（月）と16日（火）にEXPOドームで「ロボット大集合」を開催します。

具体的には、15日は各地域のロボコンを集め、多くの人に見学してもらい、16日には世界から集まった大学生が参加する「IDCロボコン」を開催します。さらに、ステージではロボットの最新技術を紹介します。

この催しでは、大学院工学研究科のロボット研究とともに友達となる未来ロボットを紹介します。この催しに、是非とも大学関係者のみならず多くの皆さんのお越しをお待ちしています。



IDCロボコンの競技風景



ドライミスト冷却装置 – さらさら霧でひんやりと –

奥宮 正哉 大学院環境学研究科教授

本システムは「細かい霧（ミスト）」をうまく蒸発させれば、気温を下げるができる。というある意味では単純な発想から始まり、経済産業省中部経済産業局の平成15年、平成16年地域新生コンソーシアム研究開発事業「ドライミスト蒸散効果によるヒートアイランド抑制システムの開発」の2年間を経てかなりの完成度を達成したものです。そして、現在開催されている愛知万博において、電気事業連合会のパビリオン「ワンダーサーカス電力館」のウェイティングスペースに設置されています。

このシステムには大規模スケールでの利用による地域・都市気候の調整と、局所的な空間に適用しての環境調整の2つの利用方法があります。ミストの噴霧量は“くすのき林の水蒸気蒸散量”に設定されていますが、これはまさに都市の中に広域な人工のくすのき林を出現させ、これによる都市全体の温度緩和を目指したもので、平成15年度は笹島地区にてこのくすのき林の効果についての実験を行い効果を検証しました。そして平成16年度には局所的な環境調整のひとつとして、日射を覆う屋根などがあり、その他は開放されているような空間にドライミストを適用した場合の冷却効果について、以下のような項目を検証しました。



- | | | |
|---|---|----------------------|
| 1 | 2 | 1 ウェイティングスペースとミストノズル |
| | 2 | 2 外部風速と温度低下 |
| | 3 | 3 温度低下と快適感 |

①ドライミスト噴霧時の空間の温度・湿度変化

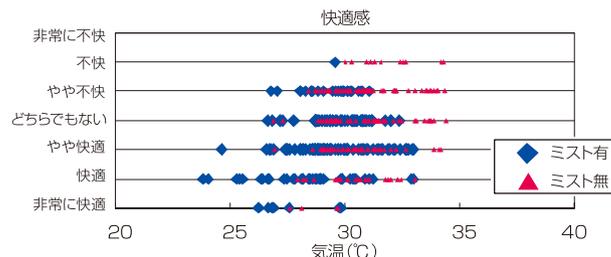
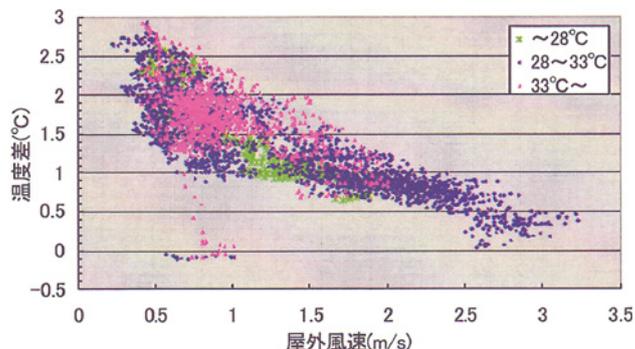
ドライミストが蒸散すれば気化熱を奪うことにより空間の温度は低下しますが、空間の水蒸気量は増加し、湿度は上昇します。またこの温度低下は外部風速にも影響を受けます。

②ドライミスト適用下での心理評価

ミスト噴霧空間においては温度低下の効果として、人間の快適感が向上し、また寒暑感としては涼しい側の申告をしており、湿度上昇の影響は見られませんでした。

このような効果の把握とともに、ミストノズルから十分に小さなミストが安定して供給されること、そして効果のある条件を適切に判断する制御の構築を行い、さらにこのほかにも約300mの配管の先のミストノズルから水の“ぼた落ち”がないようにする工夫などをしました。

万博においては、このほかにグローバループへの設置なども計画されており、暑さ対策として今後の展開が期待されています。



「光未来展」記念シンポジウムで赤崎特別教授が対談

愛・地球博「光未来展」記念シンポジウムが、5月12日（木）、モリゾー・キッコロメッセの光未来展会場内で開催され、赤崎特別教授が照明デザイナーで光文化フォーラム代表の石井幹子氏と対談を行いました。

このシンポジウムは、日本が世界に誇る先端技術から、最も優れた光素材や光機器を集めた「光未来展」の開催を



赤崎特別教授と石井氏との対談の様子

記念し、日本が育んできた光文化の国際交流と技術的交流の促進を目的として開催されたものです。

対談では、赤崎特別教授から、美しい青色にあこがれて愚直に青色LEDを追求したこと、省エネ、省資源であるLEDの発展の可能性、ご自身が現在取り組んでいる3つの研究、子供たちに科学技術に親しんでもらうためには、最初はきれいなものに接してもらうことが重要であることなどの興味深く、ユニークな話があり、一般の人にも大変わかりやすく好評でした。

対談後には、「光未来～光技術と暮らしの展望」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。

なお、このシンポジウムの模様は、6月18日（土）に、NHK教育テレビ・土曜フォーラム「21世紀の光を考える（仮）」（23時30分～24時40分）で放送される予定です。

地球平和シンポジウム開催

－中西国際開発研究科長はじめ多くの本学関係者が参画－

地球平和シンポジウムが、4月23日（土）、愛知芸術文化センターのアートスペースAにおいて開催されました。

このシンポジウムは、加藤延夫元名古屋大学総長（現愛知医科大学理事長）が代表を務める「地球平和フォーラム愛知」が主催し、「ラッセル・アンシュタイン非核宣言」の50周年を記念して7月9日にEXPOホールにおいて開催予定の愛・地球博「地球平和フォーラム」に先だって開催されたものです。

シンポジウムでは、星野光雄環境学研究科教授が司会、和崎春日文学研究科教授がコーディネーターを担当し、加藤代表及び後藤隆志万博協会事務次長のあいさつの後、森島昭夫本学名誉教授（地球環境戦略研究機関理事長）による基調講演が行われました。続いて、ハンス・ユージェン・マルクス南山大学学長、小野川和延国連地域開発センター所長、中西国際開発研究科長、環境学研究科修士のオユンナ氏の4名のパネリストによる地球環境、貧困問題、平和、ジェンダーなどをテーマにした報告があり、約220名の一般市民と活発な意見交換が行われました。



シンポジウムの様子

平野総長が高麗大学100周年記念式典に招待される

平野総長は、本学との部局間協定校である高麗大学の100周年記念行事に招待されたため、5月3日（火）から5月6日（金）までの4日間、韓国を訪問しました。今回は、名古屋大学全学同窓会韓国支部設立総会と合わせての訪問となり、伊藤附属図書館長（全学同窓会代表幹事）と同窓会担当の事務職員が同行しました。

一行は、5月3日の朝に出発し、その日の午後には高麗大学長と会見し、現在2部局（大学院教育発達科学研究科・教育学部及び大学院国際開発研究科）の部局間協定をなるべく早い時期に全学協定に発展させるべく調整を行っていくことで合意しました。

翌4日の午前中は、高麗大学のキャンパスツアーが行われ、100周年を記念して建てられた大規模な建物や設備を見学しました。その際、参加大学に各1本ずつが割り当てられたカエデの記念植樹を平野総長が行いました。午後からは、学長（総長）のみの「21世紀の大学の使命に関する討論会」が新羅ホテルで行われ、盧武鉉大統領があいさつ



植樹する平野総長



高麗大学長と握手をする平野総長

されたため、非常に厳しいセキュリティーチェックがありました。また、夜は、ソウル市長主催の晩餐会があり、高麗大学生等による豊富なパフォーマンスによる歓迎を受けました。

5月5日の午前中には、高麗大学の100周年記念式典が同大学正門前の野外ステージで行われました。式典は、各参加大学の校旗を先頭に、60以上の全世界から招待された大学の学長（総長）や、韓国内の学長が、学位のガウンを着用の上、政財界人、高麗大学同窓生等とともに入場、ひな壇に並び、その前の芝生広場に1000名以上の卒業生等が集まって行われました。平野総長はじめ壇上の人たちは、一人一人紹介され、また、盧武鉉大統領も大型スクリーンによりビデオであいさつするなど、非常に盛大な100周年記念行事でした。



記念式典の様子

名古屋大学全学同窓会韓国支部設立総会が開催される



支部旗の授与

名古屋大学全学同窓会の海外支部としては初めてとなる韓国支部の設立総会が、5月5日（木）午後、ソウル市内のアガミホテルにおいて、平野総長及び伊藤附属図書館長（全学同窓会代表幹事）出席の下開催され、韓国内の本学の留学生等で作られていた4つの同窓会支所の会長や役員を中心に約30名の出席がありました。

総会は、趙駿衡先生（江原大學校教授）の司会のもと、最初に平野総長から、韓国支部設立に感謝するとともに、卒業生（留学生）の精神的な支えになっていただけることを大いに期待していること、昨年4月に「国立大学法人名古屋大学」として新たに出発したが、本学の優れた研究の創造と将来を担う豊かな人間性を持つ勇気ある知識人の育成を通じて社会に貢献する基本理念は不変であること、最近の本学の活動紹介等の内容を含めた祝辞とあいさつがありました。続いて、尹炳虎先生（江原大學校教授）が韓国支部の支部長（会長）になることの報告とあいさつがあった後、予め作られていた韓国支部旗が平野総長から尹先生

に渡されました。

続いて行われた懇親会では、伊藤代表幹事のあいさつの後、参加者全員が現況や日本留学時の思い出を語り、また、会場のあちらこちらで、名刺の交換や久々の対面を喜ぶ姿が見られるなど、終始和やかな雰囲気での会が進行しました。

韓国支部では、今後、年1回総会を開き、同窓会活動を活発に行っていくことにしています。



参加者全員での記念撮影



あいさつする平野総長

名誉教授称号授与式・懇談会が開催される



名誉教授称号授与式の様子

名誉教授称号授与式が、5月13日（金）、豊田講堂第一会議室において行われました。

名誉教授の称号は、本学教授として7年以上勤務し、教育上又は学術上特に功績のあった方に授与するもので、今回新たに24名（新制計874名）の先生方に授与されました。

式には、新名誉教授のうち18名の方々が出席し、平野総長から一人一人に証書が授与されました。続いて、平野総長から、永年にわたり本学の教育・研究の発展のために多大な貢献をしていただいたことへの御礼と御祝いのことばが述べられた後、新名誉教授を代表して、安彦忠彦先生から御礼のあいさつがありました。

引き続き、名誉教授懇談会が、シンポジオンホールにおいて、約100名の参加を得て開催されました。懇談会は、新名誉教授の紹介で始まり、昨秋及び今春の叙勲受章者、役員・部局長等の紹介に続いて、平野総長からあいさつと、この一年の本学での動き等について報告がありました。その後、加藤延夫元総長の発声で乾杯が行われ、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われました。

この春、新たに名誉教授になられたのは、次の方々です。

- 大学院教育発達科学研究科
- 大学院教育発達科学研究科
- 大学院経済学研究科
- 大学院理学研究科
- 大学院理学研究科
- 医学部保健学科
- 医学部保健学科
- 大学院医学系研究科
- 大学院工学研究科
- 大学院生命農学研究科
- 大学院生命農学研究科
- 大学院国際開発研究科
- 大学院環境学研究科
- 大学院情報科学研究科
- 大学院情報科学研究科

- 安彦 忠彦
- 馬越 徹
- 山田 鋭夫
- 池内 了
- 舟橋 重信
- 石黒 彩子
- 宮原 洋
- 三宅 養三
- 岩田好一朗
- 河出 清
- 菊山 功嗣
- 小林 一清
- 後藤 俊夫
- 坂 公恭
- 正畠 宏祐
- 末松 良一
- 水谷宇一郎
- 水谷 照吉
- 宮田 正
- 山根 恒夫
- 小栗 友一
- 岩坂 泰信
- 井原 俊輔
- 峯村 吉泰

（敬称略）



記念撮影

文部科学省「大学国際戦略本部強化事業」 に採択される

文部科学省「大学国際戦略本部強化事業」の審査結果が4月27日（水）、公表され、本学の国際戦略構想が採択されました。

この事業は、各大学の特色に応じた「国際戦略本部」といった全学横断的な組織体制を整備し、各大学独自の国際戦略計画を立てながら、学内の多様な国際交流活動を有機的に連携した包括的な国際活動を推進することを目的としているもので、5年間継続されます。同事業には、国公立大学等から68件の申請があり、外部有識者による審査会の審査を経て、本学を含め20件が採択されました。

本学の構想は、国際学術コンソーシアム（AC21）を中心とした大学間連携の強化と包括的なベンチマーキングに

よる国際戦略計画策定システムの構築等です。また、この構想は、研究・国際交流委員会（基幹第7委員会）において検討された「国際交流協力推進本部」構想の内容を骨子としており、今後は、この構想により設置された「国際企画室」を中心に、次の主な事業計画を年次的に進めることにしています。

- ・アドバイザーの招へい
- ・国際ベンチマーキング調査による国際戦略計画システムの構築
- ・外国大学等との国際連携コーディネート
- ・外国人研究者受入れのための体制整備
- ・職員の海外研修

平成17年春の叙勲受章者決まる

－本学関係者4名が喜びの受章－

平成17年春の叙勲の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

瑞宝中綬章

清水 祥一 名誉教授（農学部）
元農学部長

瑞宝中綬章

上田 俣完 名誉教授（工学部）

瑞宝中綬章

三枝 孝弘 名誉教授（教育学部）
元教育学部長

瑞宝中綬章

堀井 憲爾 名誉教授（工学部）
元豊田工業高等専門学校長

近藤孝男理学研究科教授と 二村雄次医学系研究科教授が 中日文化賞を受賞

近藤孝男理学研究科教授と二村雄次医学系研究科教授が、第58回中日文化賞を受賞しました。

この賞は、中日新聞社が各分野で文化の向上に寄与した個人又は団体に贈るものです。

近藤教授の受賞業績は、「生物時計の分子機構解明」で、自らが発見し、名付けた時計遺伝子「Kai 遺伝子」が生み出す3つのタンパク質を使い、試験管の中で生物時計を再現することに成功し、その本体が遺伝子とタンパク質との相互作用ではなく、タンパク質の化学反応で動いているという事実を発見したことが評価されたものです。

また、二村教授の受賞業績は、「肝門部胆管がんに対す

る根治的外科治療法の確立」で、消化器がんの中でも手術が困難で、以前は治療がほぼ不可能だった肝門部胆管がんの精密診断法と根治性、安全性の高い手術法を確立したことが評価されたものです。

なお、贈呈式は、5月31日（火）、中日パレスで行われました。



近藤孝男理学研究科教授



二村雄次医学系研究科教授

今年度の大学見学始まる

総務広報課では、高校生、中学生、PTA等を対象とした大学見学を受け付けており、主に、本学紹介ビデオの視聴、博物館や附属図書館の見学、部局の協力による学部説明や模擬講義を企画しています。今年度も4月21日（木）の麗澤瑞浪高等学校を皮切りに、見学シーズンが始まりました。

見学希望者は年々増加しており、平成16年度は42団体、2,689名で、平成15年度に比べ、見学者は1.8倍になりました。



博物館で西川教授から説明を受ける高校生

大学見学の一例（藤枝東高等学校2年生39名）

10：00～10：40	全体説明・広報ビデオ視聴 (於：シンポジオンホール)
10：40～11：40	模擬授業（農学部・並河鷹夫教授） (於：シンポジオンホール)
11：40～13：00	昼食（学食利用）・自由散策
13：00～14：00	模擬授業（教育学部・大谷 尚教授） (於：教育学部)
14：10～14：30	附属図書館見学
14：40～15：00	博物館見学

平成16年度大学見学受入状況

区分	訪問数	人数	
高等学校	愛知県	5	439
	岐阜県	7	568
	三重県	2	426
	その他	9	558
PTA、教員	11	593	
中学校	5	45	
その他	3	60	
合計	42	2,689	

平成17年度科学研究費補助金の配分状況について

独立行政法人日本学術振興会のホームページに平成17年度科学研究費補助金の配分状況が公表されました。これを基に常勤研究者一人当たりの配分額を下表のとおり算出しました。本学は研究者一人当たりの配分額は2,893.98千円、

採択件数は0.6696件となり、全体では第6位となります。なお、本学の平成17年度採択件数（1,212件）は、昨年度に比べ149件増となっています。

平成17年度科学研究費補助金（新規+継続分）常勤研究者一人当たりの配分額・採択件数（上位10機関）

順位	機関名	研究者数 ：人	採択件数 ：件	配分額	研究者一人当たり	
				(直接経費)：千円	配分額：千円	採択件数：件
1	東京大学	4,165	2,751	16,249,755	3,901.50	0.6605
2	京都大学	2,957	2,170	10,217,300	3,455.29	0.7339
3	東京工業大学	1,160	761	3,823,400	3,296.03	0.6560
4	大阪大学	2,436	1,627	7,478,300	3,069.91	0.6679
5	独立行政法人理化学研究所	693	479	2,117,500	3,055.56	0.6912
6	名古屋大学	1,810	1,212	5,238,100	2,893.98	0.6696
7	東北大学	2,581	1,679	7,295,400	2,826.58	0.6505
8	北海道大学	2,154	1,312	4,870,621	2,261.20	0.6091
9	九州大学	2,273	1,347	4,762,300	2,095.16	0.5926
10	筑波大学	1,650	850	2,595,500	1,573.03	0.5152

注1) 研究代表者の所属する機関により整理している。

2) 本年度は、大学の規模を考慮し、指標として研究者一人当たりの配分額により順位を表示した。

3) 本学以外の研究機関の研究者数は、各機関のホームページに掲載されている職員数から引用した。

* 日本学術振興会のホームページ「平成17年度科学研究費補助金の配分について」

採択率・採択件数上位機関一覧（平成17年4月27日掲載）をもとに作成

「百円しかない」を方言で？ —「しか」の動態に見る日本語の構造—

宮地 朝子 大学院文学研究科講師

現代日本語で全国共通の「百円しかない」という表現に対し、表題の問いには思いのほか多様な回答があり得ます。単純化して挙げれば「百円きりない」「～よりない」「～ほかない」（「はか」とも）「～こそない」「～かない」など（図1参照）。この「しか」の動態と性質は、日本語の構造的な問題の様々な多様な示唆を与えてくれます。

「 x しかない」は、「 x 以外のもの（ x のその他 = 同じ集合に属する他者）の存在を否定して反転的に「 x だけある」ことを限定する〈其他否定〉という意味を表します。否定表現と共に・拘束関係を持つこの種の表現は他言語にもありますが、「しか」には近世以降成立した「古語にない」「係助詞である」という（係助詞が古語特有のものとするれば）矛盾した興味深い性質があります。この謎に資料の制約を超えて迫るために、多様な方言形式とその振る舞いがヒントとなります。

語順に端的に表れる文法的性質から見ると、「しか」は他の助詞に後接できる一方（君にしか頼まない／百円だけしかない）、後接されることはありません（×百円しかだけない／×君しかに頼まない）。これが伝統的国語学でいう「係助詞」特有の文法的特徴であることは興味深い事実です。現代語では「は」「も」などが同じ特徴を持ちますが、係結びが（目に見え）ない現代語には係助詞を立てない考え方が一般的です。しかし係結びがいかなる言語現象であったのかは実は未解明です。この、目に見える特徴を持つ助詞が現代語にも存在することを重視し、古語になく個性的な意味を持った「しか」を係助詞と考えることは係結びの原理的解明や日本語の構造の歴史にも示唆するところがあるでしょう。「しか」の方言形式は、係助詞としての特徴を例外なく示します。古語で係助詞であった「こそ」「か」の存在、沖縄の「百円どうある」という係助詞「ぞ」由来の表現も興味深い傍証です。また「より」「ばかり」「ぐらい」「きり」等〈程度〉〈量〉〈比較の基準〉などの意味を持った要素が〈其他否定〉用法を獲得している事実が確認されています。このことは、〈程度〉〈量〉

〈比較の基準〉と〈其他否定〉の意味的関連性を示し、〈程度〉〈量〉〈比較の基準〉とは違って〈其他否定〉がなぜ係助詞なのかという問題に示唆を与えるものです。

歴史にも方言がヒントをくれます。古語には「しか」はおろか該当する助詞もありません。「しか」は近世中期江戸語文獻から確認できますが、中世以前の文獻資料がなく成立過程を調べる術がありません。資料のある古代中央語（平安時代京都語）では、「風 x よりほかに訪ふ人 X もなし（ $x \in X$ ）」など、 X の非存在を表して x の〈其他否定〉を結果的に表しました。このタイプの表現は現代語でも存在しますが（これ x よりほかに方法 X がない）、それとは別に「しか」や多様な方言形が成立していることを考える必要があります。方言では古代中央語の末裔として京阪に「より」「ほか」が分布します。これらについて史的变化を追うと、上の非存在文を源に係助詞「は」に後接された段階（（より）ほかは／よりは）を経て、近世初期〈其他否定〉助詞となったことが確認できます。後接した「は」がウイルスよろしく性質を伝染させたというべき興味深い過程は、係助詞の性質に合致すると同時に、「しか」の成立過程にも仮説を与え、興味深い言語変化の一類型を仮設するという一般的・構造的な問題にも展開していきます。

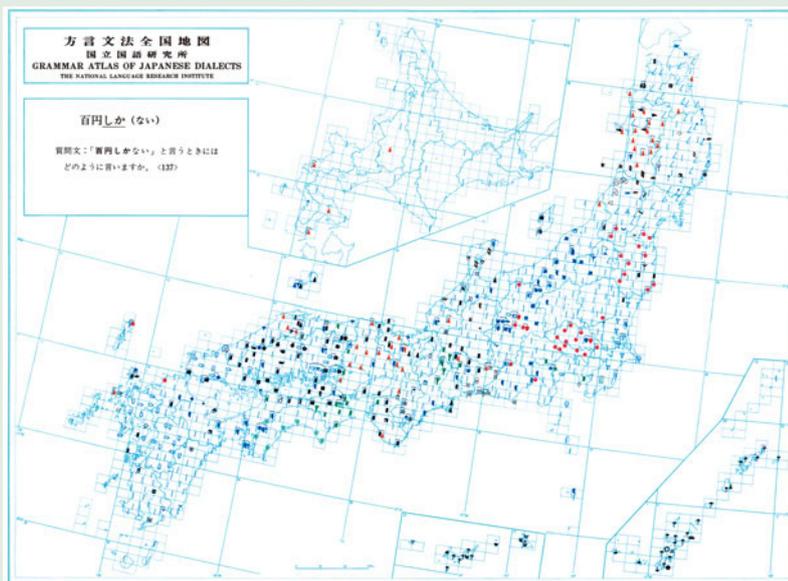


図1 「百円しかない」方言分布（『方言文法全国地図』1-51図（国立国語研究所）
主な記号 /しか ▲より ■ほか ◆はか ●か ▼こそ ○きり

生理活性天然有機化合物が活性を発現する仕組み

磯部 稔 大学院生命農学研究科教授／高等研究院流動教員

私はこれまで、有機化学とくに天然物有機化学の分野で研究をすすめ、微量な物質の構造決定・構造の複雑な分子の化学的合成・右手と左手の関係にある分子の選択的合成・およびそれら分子が生体内でどのようにして機能しているのかについて研究を行ってきました。すなわち、有機分子の分離・取り扱いを始めとして、その分子変換と合成・スペクトルによる構造・小さな有機分子とタンパク質のような巨大な分子との複合体の構造研究などを基礎にして、最近では生物有機化学的な研究にまで拡大しています。生体内で特異な生理作用を示す有機低分子と、それらが標的としているタンパク質分子について、実際に両者がどのような相互作用をしつつ、分子情報を適切なタイミングで生体系に伝達するのかというところまで拡大してきました。

具体的には、生物発光の不安定な発光物質の分離・構造研究や、短寿命な中間体の構造決定・発光の分子機構・発光タンパク質における発光素子の構造研究やその分子動態を研究しています。材料としては、発光イカ・ホタルイカ・ミミズ・ヤスデ・クラゲ・キノコ・ウミホタル・ホタルなどの発光物質と発光の分子機構研究を行っています。

タンパク質の機能はリン酸化・脱リン酸化で機能が調節されており、タンパク質脱リン酸酵素の阻害剤であるオカダ酸とトートマイシンの全合成完成をきっかけとして、これらの分子が脱リン酸酵素表面上でどのような動きをするかを課題として、低分子と生体高分子の相互作用研究という一般課題の中心として、核磁気共鳴装置や質量分析の最新の進歩を促しながら研究を進めています。関連するタンパク質と阻害剤との複合体の3次元

構造データを参考にしつつ、その分子動態を超微量で解析する手段を開発し、その実際の動的解析を行っています。

昆虫休眠ホルモンの単離・構造研究を20年ほど行ってきましたが、その一応の完成を見て、カイコの卵休眠における時間読みタンパク質の構造と時間読みの分子機構を化学的に解明することを目指して研究を進めています。糖・金属タンパク質であるこの時間読みタンパク質分子と、時間読みを調節しているペプチドとの相互作用をはじめとして、タンパク質の動きを解析する新しい手法を開発してほぼその様子がわかってきました。

ふぐ毒で有名なテトロドトキシンの化学合成と、それが作用するナトリウムチャンネルに逆の作用をするシガトキシンの化学合成を目指して約10年。前者の化学合成をすでに完成し、後者の完成も間近になりました。そのほか、カリウム選択的なイオノフォアや重金属結合ペプチドなどのペプチド化学の研究も、タンパクの構造と機能の研究には良いモデルとなると考え研究を進めています。

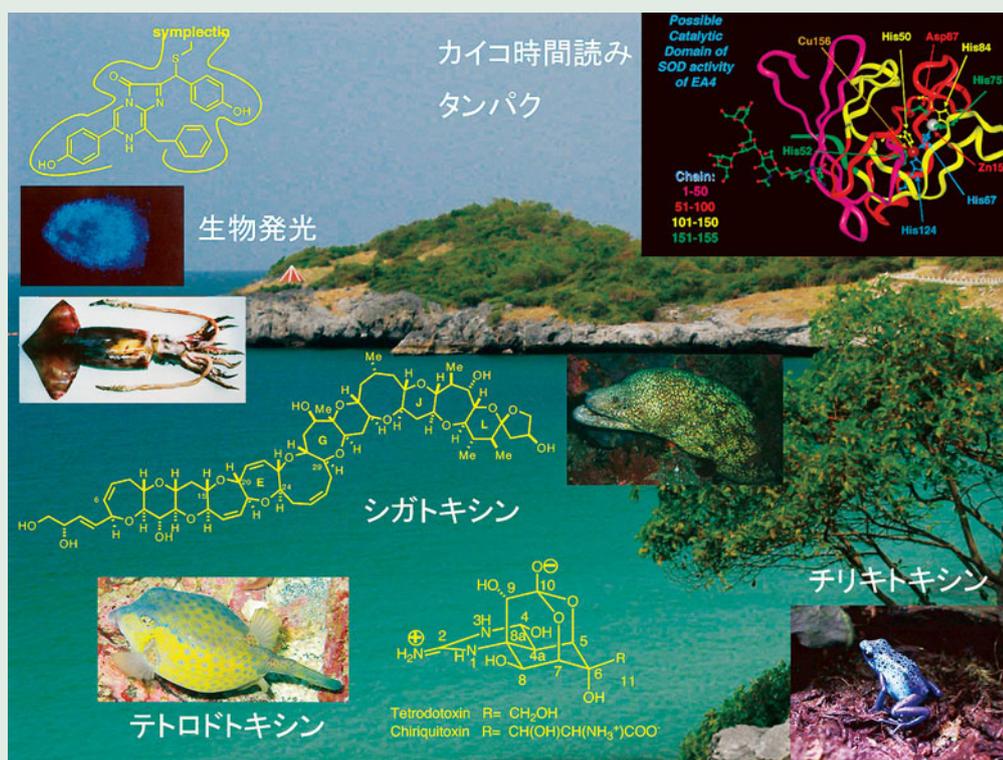
研究のねらい

生理現象の多くは、化学物質により情報伝達されることで効率よく機能しており、その情報伝達は、生理活性物質とその標的となるタンパク質分子とが理想的に会合することを鍵段階として引き起こされます。活性発現の現場では、構造認識機構によって分子情報が伝達され、滝の流れのように分子情報が次々と細胞内を流れていきます。私はこれまで、分子情報伝達のもとになる生理活性天然有機化合物が巨大なタンパク質分子の中で果たす分子構造相互認識機構の役割と原理を解明す

る手法と、有機合成を駆使して巨大天然有機化合物を合成する技術を確認してきました。これらの手法と技術を駆使して、活性の著しい天然物とタンパクを模範として、その分子間相互作用を解明し、究極的にはそこで明らかになった原理に基づく合理的な分子設計を通して薬を創製する創薬化学に利用する道を開拓し、社会に貢献ことが本研究の大きな狙いです。

本研究で展開されている解析手法を合理的分子

設計にフィードバックすることは、分子科学において生理作用が強すぎるために毒性物質として取り扱われるものの、創薬の基礎科学として位置づけることができます。数打てば何かの薬になるのではないかという流行の技法とは異なり、本研究成果により合理的・論理的分子設計に基づく創薬の創製科学の基礎として社会への貢献を目指しています。



図：海洋から地上まで、生物は多様な生理活性物質を利用している。それぞれの天然有機化合物について、生体内での活性発現・情報伝達機構を解明したい。

1944年生まれ。1967年名古屋大学農学部農芸化学科卒業。1969年名古屋大学大学院農学研究科修士課程修了。1970年名古屋大学農学部助手。1973年農学博士（名古屋大学）。1973年-1975年コンビア大学博士研究員。1975年名古屋大学農学部助教授。1991年名古屋大学農学部教授。1993年名古屋大学農学部応用生物科学科に移行（生物有機化学講座）。2004年名古屋大学高等研究院流動教員。1980年日本農芸化学会・農芸化学奨励賞受賞。1996年有機合成化学協会賞（学術的）受賞。2000年日本農芸化学会賞受賞。IUPAC Division President of Organic and Biomolecular Chemistry (2004-2005)
 モットー：人と違う独創的な研究にこだわること。
 趣味：宴会・ドライブ
 連絡先：isobem@agr.nagoya-u.ac.jp
 研究室ホームページ：http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/%7eorganic/

いそべ みのる



社会との通路としての名古屋大学公開講座

戸田山 和久 社会連携推進室長

名古屋大学公開講座は平成44年に名古屋市教育委員会との共催事業としてスタートし、昭和50年に名古屋大学の主催事業となってから、すでに36回を数えています。また、昭和61年からはラジオ公開講座も開講されるようになり、こちらも19回を数えています。ここ数年のテーマを挙げてみましょう。「あきらめない・あきらめる」(平成13年度)、「空間を生きる」(平成14年度)、「越境を科学する」(平成15年度)、「見る」(平成16年度)と、多彩であると同時に、テーマに知恵を絞った公開講座委員会の方々の苦勞もしのばれます。

名古屋大学は「公開講座等の社会人のための教育サービスの充実を図る」という中期計画を掲げています。このことの意味を考えてみましょう。大学における学問・科学研究はさまざまな回路を通じて社会に貢献しています。役に立つテクノロジーの開発を通じて、じかに人々の生活レベルの向上の役に立つ、というやり方もあるでしょう。しかし、社会が大学に期待している貢献はそれだけではないのだということが、公開講座を通して見えてきます。アンケート結果が示すように、公

開講座に足を運んでくださる方々の受講動機は、まず「興味・関心があるから」(41.4%)、そして「教養を高めるため」(33.1%)です。市民の皆さんは、研究結果の技術的・社会的応用だけでなく、学問・科学研究を通じた真理の探究が行われているということそのものが、大学、そして社会の貴重な財産であると考え、研究の「驚き」や「どきどき」を共有し、知的好奇心を満たしたいと思っ

てくださっているということが見えてきます。もしかしたらこれって、われわれにとってすごくうれしいことではありませんか？ 公開講座には固定ファンも多くいらっしゃって、友の会的な組織を自主的に作って活動されている方もいます。知的探求そのものに価値を見出すコミュニティが大学と地域にまたがるかたちで存在しているということは、大学にとっての大きな力となっていくでしょう。受講者層は、60歳代が42.3%、次いで50歳代が19.4%とやや高齢化が進んできていますが、受講のしやすさ、テーマ設定、広報の仕方などを工夫して、より若い世代にも浸透を図っていくことが、今後の課題です。

○平成17年度名古屋大学公開講座

テ マ : 情報が世界をつくる！

開講期間：8月23日(火)～10月11日(火) 原則火・木曜日(全15回)

講義時間：午後6時～7時30分

講義場所：名古屋大学シンポジオンホール

修了証書：10回以上の出席者に交付

募集定員：200名

受講料：9,200円

申込期間：7月1日(金)～8月19日(金)

後援：愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会

講師：公開講座委員会で選任した本学教員

○平成17年度名古屋大学ラジオ放送公開講座「名大リレーセミナー」

テ マ : 安全・安心な社会をめざして

放送日時：7月3日～9月4日の毎週日曜日(10回) 午前7時30分～8時

放送局：東海ラジオ(1332kHz)

講師：公開講座委員会で選任した本学教員

*詳細については、次号及びホームページに掲載する予定です。

航空部が新鋭グライダーの命名式を挙行政



航空部は、4月23日（土）、シンポジオンホールにおいて、新たに導入された新鋭グライダーの命名式を挙行政しました。

新機体は、老朽化のため平成14年から使用できなくなった複座機に代わる機体として、航空部OB・OG及び名古屋大学校友会の援助により購入されたドイツ製の新鋭高性能複座練習機で、この式典において「遙」（はるか）と命名されました。この新機体を使用して、今年3月下旬に開催された七大戦グライダー競技団体戦において見事6連覇を果たすなど、既に「遙」は航空部の活躍に貢献しており、航空部の今後の活動に大いに寄与するものと期待されています。

この命名式は、若尾副総長（名古屋大学体育会副会長）や本学関係者、近隣大学の航空部部长、日本学生航空連盟関係者、航空部OB・OGなど約50名の参集のもと、会場内に展示された新機体を前に行われ、新機体の命名及び除幕と同時に、会場は盛大な拍手に包まれました。また、命名後には、安全祈禱が行われ、厳肅な雰囲気の中、参加者全員で乗員と機体の安全を祈願しました。

続いて行われた祝賀会では、ハウストレーラー牽引用ワゴン車が航空部OB・OGから航空部に

寄贈された旨の案内があり、これを受け、現役部員からOB・OGに対し謝意が述べられるとともに、最近の競技会の結果が報告されました。会場では、現役部員の活躍に目を細めたり、旧交を温めるOB・OGや関係者の姿があちらこちらで見られました。



- | | |
|---|---------------------|
| 1 | 1 待望の新グライダー「遙」（はるか） |
| 2 | 2 記念撮影 |
| 3 | 3 試乗する若尾副総長 |

漕艇部のボート艇庫兼合宿所の改修及び増築が完了

名古屋市の中川区大蟠郷町にある漕艇部のボート艇庫兼合宿所の改修及び増築工事が3月下旬に完了し、4月2日(土)、若尾副総長及び漕艇部OB・OG出席の下、現役漕艇部員による新艇庫のお披露目式が行われました。

この艇庫の増築に当たっては、漕艇部OB・OG会から多額の寄附金を本学にお寄せいただき、近年の部員増及び所有艇の増加に伴い手狭になった既存艇庫北側に新艇庫を増築することができました。

新艇庫は、1階にボート艇庫を設け、2階には女子部員専用のドレッシングルーム・浴室等も完備し、併せて女子及び男子用の居室も設けるなど、最近の女子部員の各種大会における好成績にあわせ、女子用の合宿設備の充実が図られています。

お披露目式には、漕艇部OB・OGの他、前漕艇部長である故新井紀男工学部教授のご家族もお越しになり、新井教授が切望しておられた新艇庫を感慨深げにご覧になっていました。

また、お披露目式に先立ち行われた名古屋工業大学漕艇部との対抗戦では、男子対抗エイトは3年ぶりの勝利を収め、お披露目式に華を添える結果となりました。

午後から、OB・OG会の方々は、新艇庫増築を祝うと

ともに、名阪戦で交流のある大阪大学漕艇部OB・OG会の方々も招き、和やかな雰囲気の下、若かりし時代の名阪対抗戦に思いを馳せ、旧交を温めていました。



新艇庫内



新艇庫外観

米国国際開発庁局長代理の講演会開催 —津波支援で関係機関の連携訴える—

■名大津波被災者支援院生有志会

大学院国際開発研究科の学生を中心にスマトラ沖地震の被災者支援活動を続ける名大津波被災者支援院生有志会は、4月18日(月)、同研究科多目的オーデトリウムにおいて、名古屋アメリカン・センターと共催で、米国国際



講演するガーヴァリンク氏

開発庁の民主化・紛争・人道援助局局長代理ウィリアム・ガーヴァリンク氏を招き、スマトラ沖地震への国際的な支援のあり方に関する講演会を開催しました。

講演会には、同センター館長のマイケル・ターナー氏、在京米国大使館国際協力参事官のチャールズ・アーネンソン氏も来場し、また、学内外から学生や教員約50名が参加して熱心に聞いていました。

ガーヴァリンク氏は、“Effective Civilian and Military Coordination in Disaster and Humanitarian Operations: the U.S. Experience in the 2004 Tsunami Relief Effort”(災害・人道援助における民間組織と軍隊の効果的な協力: 2004年スマトラ沖地震の経験)をテーマに講演を行い、今回の地震被害に対する緊急人道支援に携わった経験に基づき、NGOや国連機関、軍隊が現場で連携する大切さを訴える一方、それぞれの活動を調整する難しさについて話しました。

参加者からは、「今後どのような復興支援策が検討されているのか」、「現地住民の意見はどのように取り入れるのか」等の質問が出され、活発な議論が交わされました。

東と西をにらんで独自の道を！

安彦 忠彦

大学院教育発達科学研究科



この度、敬愛する名古屋大学から名誉教授の称号を頂けるとのこと、大変ありがたく、また嬉しく、光栄に思っています。2002年3月に、満60歳になり、教育学部の種々の役職の任期もちょうど切れるので、思い切って途中退職させて頂いたのですが、今に至っても心にかけてくださった教育学部・名古屋大学の先生方のご厚意に、心から感謝を申し上げます。

ところで、私は、東京にいた学生時代から、名古屋大学教育学部に対して、戦後の教育界、教育学界をリードしてきた大学学部として、ある種のおこがれをもっていました。戦後できた新学部として、教育学部や薬学部、教養学部などがありますが、名古屋大学の教育学部は、昭和20年代から学界や教育界に、理論と実践の両面で全国的な影響を与え、それは東京大学に優るとも劣らない最高レベルのものであったと言えます。とくに、教育界の教育実践家に大きな影響を与えたことは、今でも他の大学を凌ぐものとも誰かが認めるところです。それは、「事実に基づき、事実を創造する」という実証的・実践的精神が、学部スタッフの間に満ちていたからでしょう。「教育」という分野は、「事実」をつくれなければ無意味に近い（全く意味がないとは言いません）、と私は考えてきました（その点では理系の工学部に似ていると思います）。その伝統は今後も保たれてほしいと思っています。

そのような大学学部のスタッフに、思いがけず求められて加わったのは、1980年10月でした。1968年に東京から大阪大学に奉職し、ついで1971年、愛知教育大学に転じた後、そこで「教育の事実をつくる」未来の教師の卵を育てることに一生を費やしてもよい、と考えていました。しかし、その頃、名古屋大学教育学部はそのような仕事を、教員養成ではないにも関わらず一貫して行っていること、そしてそれが他の国立大学の教育学部と比べても、抜きん出た特色として成果を挙げていることに、心から敬意をもっていました。

東京大学教育学部は理論的には常に先頭を切る役目を負っていますが、私の学生時代は実践との関係となると名古屋大学ほどのことはありませんでした。一方、当時の京都大学教育学部や大阪大学文学部教育学科は、東京大学の後を追わず独自の方向を探るか、あるいは反対の立場をとるという形で、いつも関西としての特色を出そうとしていましたが、実践との関係はやはり必ずしも強いものではありませんでした。そういう意味で、東京で学び、大阪で仕事に就いた私は、愛知ないし名古屋がその両方を見ることができる非常によい場所である、と感じました。これは、それぞれの場所を回ってきたから言えることでしょう。私は、このことを最大限利用・活用しました。自分の研究を、東と西の両方をにらみながら、そのどちらでもない独自の道、あるいはその両方を総合する道を探ることに努めました。結果に対する評価は別として、このような努力や構えは非常に意味があったと思います。

このような地の利は、名古屋大学全体について言えることで、教育学部だけのことではありません。しかし、教育学部はとりわけその点で伝統もあり、成果も挙げてきているのです。これを具体的に支えているのは、「多様な人材」による「学部の学風の自由さ」です。「人材の多様性」を維持するということは決して容易なことではありませんが、これが個々人の研究・教育の自由を尊重することの基礎にあるのですから、法人化しても守られねばなりません。そしてそれが、「自主自律」の精神によって、自他に対してともに厳しくあらねばならない、という基本的態度を生むものであってほしいと思います。今後も、名古屋大学がそのような精神で、日本全国さらには世界に発信し続けて欲しいと願っています。

世紀末の大学改革のなかで

馬越 徹

大学院教育発達科学研究科



このたび名誉教授の称号をいただくことになり、大変光栄に存じます。それにつけても思い出すのは、大学院生時代に聴いた講演のひとつです。それは世界的に著名なケンブリッジ大学の教授が「自分は定年を迎えようとしているが、もともと労働者階級の出身で、しかも30年に一度しか交替のない教授のポストに就けるなどは夢にも思わなかった」としみじみ語ったシーンです。田舎出身の院生にとって、教授職ははるか遠い存在に思えたものでした。

第二次大戦後の日本の「新制大学」とオックス・ブリッジを比べることはできないにしても、いわゆる研究大学の講座制の下で教授ポストに就くには、いくつもの偶然が重ならなければ叶わないものです。それだけに私自身が1986年から2003年までの17年間、名古屋大学教育学部（現大学院教育発達科学研究科）の講座にその席を与えられ、研究・教育に精進できたのは僥倖以外の何ものでもありませんでした。

実は、私が名古屋大学に着任した時の所属は「講座外講座」という不思議な名称の講座でした。それは将来「講座」を実現する芽として工夫されたポストであったのです。爾来、私はそのポストを正規（省令）の「講座（いわゆる小講座）」にすることに全精力を傾けることになりました。しかしバブルがはじけた90年代の日本社会は、高度経済成長期のような気前のよさはなくなっており、行政改革・定員削減の嵐の中で、講座増設（教授、助教授、助手、計3ポストの純増）の概算要求は至難の業でした。ただ第二次ベビーブーム世代がピークになるという時の利がありました。入学定員の臨時増という運を味方につけて、1995年度に「比較国際教育学」講座増設（純増3ポスト+外国人客員教授）の宿願を果たせたことは、望外の幸せでした。

ところが1991年の大学設置基準改定にはじまる一連の大学改革、とりわけ大学院重点化（部局化）の大波の中で、小講座は「大講座」という名の教員集団に有無を言わせず再編を余儀なくされ、さんざん苦労して作り上げた教育学

部最後の小講座は、創設2年足らずで解体される運命に遭遇することになりました。しかも評議員の一人として、大学院重点化の旗振りを演じなければならない役が自分自身にまわってきたのは、なんとも皮肉としか言いようがありませんでした。

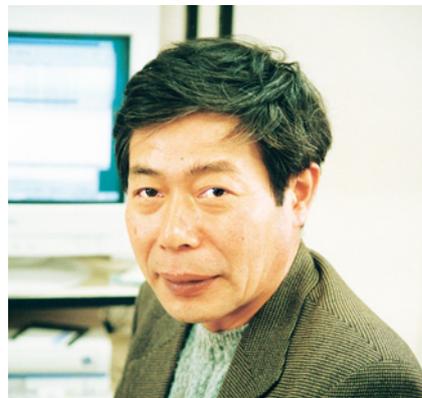
もうひとつ私のかかわった大学改革関連の仕事として、留学生センター（1993）と高等教育研究センター（1998）の創設があります。いずれも概算要求に関わり、初代センター長（併任）としてその運営を担いましたが、そこでの仕事は学部・研究科の講座とは対極の、全学的な教育機能の強化を目的とするものでした。したがって私自身は、教育学部の小講座をベースにした学部・大学院教育の改革と、センターをベースにした大規模な全学的教育改革の狭間で翻弄され通してました。しかしその問題を解くことこそが、大規模化する大学の改革課題そのものだったと思います。

基準の大綱化にはじまった90年代の大学改革は、国立大学の「法人化」にまでたどりついたとはいえ、それはピースミールな改革の寄木細工に過ぎず、必ずしもグランド・デザインに基づいたものではありません。その証拠に、解体された講座制に代わる磐石な研究・教育モデルはまだ構築されていないようです。市場原理が大学経営の主流になるなかで、大学文化を支えてきた「同僚性 (collegiality)」原理は危機に瀕し、学生文化も大きく変質しつつあります。願わくは、名古屋大学の同僚の皆様が、他大学の追従を許さない研究・教育の21世紀モデルの創出することを期待します。末筆ながら、在任中お世話になりました関係者各位に心からお礼を申しあげるとともに、名古屋大学のさらなる発展を祈念いたします。

名古屋大学に一言

池内 了

大学院理学研究科



定年を後3年残して名古屋大学を去ることになった。結局、名古屋大学には7年6ヶ月お世話になったことになる。

思えば、私は5度も大学を変わってきた。京大の助手を皮切りに、北大助教授、東大助教授を経て国立天文台の教授になった。4年ばかり経つうちに大学に戻りたいとすきりに思うようになり（天文台では天文学の専門家としかつきあえず、もっと広い分野の研究者との交流を望んだのだ）、阪大に宇宙進化学講座ができる機会に移ることにした。ところが、阪大には5年弱しか勤務しなかった。阪大の持つ独特の雰囲気馴染めなかったのだ。大学は普遍的な学問を追究する場所ではあるが、やはり校風とか歴史の重みというものがあり、大学が存在する都市の影響も受けている。それが体質に合わなかったのである。では、それが何であるかと問われてもはっきりと答えられないが、研究室名に教授の名が付いているように、何もかも教授が差配する習慣が気に入らなかったのかもしれない。

そして名古屋大学に移ってきた。教員生活の最後の10年間をここに居ようと思って来たし、居心地も悪くなかった。しかし、結局出るようになってしまった。その理由はいくつもあるが、ここでは2つのことを述べておきたい。

1つは私個人の問題で、55歳を過ぎたあたりから学問への情熱が涸れてきたことを感じ始めたことにある。学術会議など学外の仕事が多くなるにつれ、学問が片手間のごとくになり、徐々に熱意を失っていく自分であった。自らを叱咤するが、心の底から込み上げてくる情熱が薄れてきたのだ。そんな自分を知りながら、権威だけで教授の職に固執するのは私の主義に合わない。このまま居座るより、若い澆刺とした新しい教授を迎えるべきだと判断して、私を迎えてくれる大学を探すことになったわけである。

もう1つの理由は、名古屋大学が文部科学省の意向を伺う体質が強いことに失望したことだ。朝鮮学校卒業生の入学資格問題を取り上げ、ささやかながら運動をして当時の総長や副総長と会見したことがある。そのときの総長の返

事は「国立大学の設置者である国の方針が変わらない限り無理」というものだった。国立大学の設置者は、国ではなく、税金を払っている国民である。そして国民が望んでいることであれば、国がどう言おうと率先して実行するのが大学の国民から課せられた役割である、それが私の考えであった。国は朝鮮学校が学校教育法の第一条校ではないことを理由に受験を拒否しているのだが、そもそも入学試験は実力を験するためのものであり、大学は実力のある者を選んで受け入れる義務を負っているはずである。京大が大学院入試で朝鮮大学校卒業生を受け入れることを単独で決めたことから急速に風向きが変わり、翌年には大学入試まで受験資格を広げることになったのだが、名古屋大学は文部科学省の言いなりにしか行動できなかったのだ。

国立大学の法人化問題でも同様であった。名古屋という堅実な都市にあるせいか、名古屋大学も目立つことを避け、二番手三番手でも固い仕事をするという体質が身についているように思われる。それが学問にも影響しないか心配である。さらに、国（文部科学省）に堂々と反論していく気風も弱いままである。それでは大学の役割を果たせないと思うのだ。嫌みを言って去るようだが、国立大学が今正念場にあるからこそ、あえて苦言を呈した次第である。

大学におけるスキルの保有こそ大切

末松 良一

大学院工学研究科



昭和41年に本学工学部機械学科を卒業して以来、本年3月退職するまで、本学を一步もでることなく、名古屋大学にそして多くの皆様にお世話になりました。特に工学研究科の皆様、機械理工学専攻の教職員の方々ならびに、留学生センターの皆様にご指導ご鞭撻を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。停年まで2年を残して名古屋大学を退職し、本年4月からは豊田工業高等専門学校長として、新たな職場での生活をスタートいたしました。

思えば、私の大学院学生時代や助手時代には、工学部の講座（研究室）には、2名の技官（技術職員）がいました。自分の研究に必要な実験装置の製作の際には、技術職員に密着して、工作機械の清掃、後片付けを手伝い、少しでも早く製作してもらうため、付き添っていたものでした。そのおかげで、旋盤やフライス盤などの基本的な作業を自分でもできるスキルを身につけることができたのです。私の行った研究業績は、些細なものでしたが、その成果は技術職員に製作していただいた手作りの実験装置に負うところが多大であったと痛感しております。

それから30年余、定員削減の荒波が大学を襲い、事務職員、技術職員の数が大幅に減少してしまいました。名古屋大学の教職員の総数は、ほとんど変化していないので、結果的に教員数が増加し、教育研究をサポートする事務職員、技術職員が減少した訳です。このような状況は名古屋大学だけでなく、国立大学に共通した現象となっています。

さて、科学技術立国としての国の発展は、科学・技術・技能に関する国民の保有する総知識量で決まるといわれています。すなわち、技能（スキル）に関する知識量が衰退すれば、科学技術の創造的・継続的発展は望めないということです。国の最高教育研究機関である大学においても同じことが言えるのではないのでしょうか。

平成16年4月に独立法人化を契機に、名古屋大学には、全学の基盤支援機構の1つとして位置づけられた全学技術センターが設置されました。全学的に公平な技術サービス

を受けられるようにするため、部局に分散配置されていた技術職員の配属配置換えを行い、先端的創造研究や部局間連携型の研究、並びに教育の高度な発展を支える基盤センターとして活動を開始しました。同時にこれまでの数々の独創的研究で培われたスキルの蓄積・継承を担うことも目指していると聞いております。

技能の衰退は気づかずに進行しますが、失われた技能を復活させるには多大な時間と労力を要することは、人類の歴史が示しています。その意味で、昨年名古屋大学に設置された全学技術センターの活動に大きな期待を抱いております。全学技術センターの充実・発展のために、現在の技術職員の配置換えだけでなく新たな人材の投入を望みたいと思います。たとえば、民間企業を退職した優秀な技能者を任期付年俸制で採用することも一案ではないでしょうか。

全学技術センターの活躍が、名古屋大学における創造的教育研究の発展に大いに貢献することを信じております。

世界的産業技術中枢圏に位置する名古屋大学のフロントランナーとしての発展を心から祈念しております。

名古屋大学を去るにあたって

岩坂泰信

大学院環境学研究科



このたび、名古屋大学から名誉教授の称号をいただき、大変光栄に思います。定年すこし前に金沢大学へ移りました。東京大学大学院を終え、名大理学部附属水質科学研究施設の磯野謙治研究室に助手として勤めて以来、何回か所属部局を変えましたが、ずっと名古屋大学で研究・教育に携わってきました。最初の勤務先であった研究施設は、地球科学のいろいろな分野の先生が大変元気な研究室を構えておられました。「自然」という雑誌（残念ながら廃刊。戦後の科学の発展を支えた雑誌の一つ）が「小さい組織ながら世界的な成果が次々に出ている」と紹介したくらいです。気象学・大気科学では、自前で実験や観測を行う機運が生まれた頃で、研究室に実証に基づいた科学をするという気風が根付いて行くのを実感でき、大きな幸せでした。この研究施設が水圏科学研究所に改組され研究部門の新設が続き、大学院生の受け入れかたも変わって大勢の大学院生が研究所で勉強するようになりました。とはいえ、おらかなところがまだまだ残っていた時代でした。イギリスで勉強できたのも、24次南極観測隊への参加を許してもらえたのも、武田喬男教授のもとで助教授を務めていた時であり、今のせわしない大学からは想像出来ません。

南極観測では、「探検から観測へ」を合言葉に観測レベルを格段に向上させ世界レベルの仕事をするのが隊員に要求されるようになりました。当初は、まだ甘さが心の隅にあったのですが、南極科学界の大御所である永田 武先生が観測の準備状況を大いに気にしているとの噂を聞いて、成果が出なかったらえらいことになりそうだと改めて気を引きしめたものです。当時、ライダー装置の開発や大気観測への応用を仕事にしており、ささやかな成果も出始めていた時でした。そのため、南極成層圏のライダー観測の担当となったのですが、友人達にすれば「南極でライダーを動かすなんて無謀だ」、「岩坂の研究者としての命も南極に出発するまでだ」でした。この装置がおそろしく不安定なものであることは、関係者の間ではひろく知られて

おりました。不安材料は山積でしたが、「サイは投げられた」のですから逃れるすべはありません。予想通り南極では故障の連続で、そのたびに4畳半ほどの大きさの回路図を何枚も広げ、図面の真ん中であぐらをかいて故障箇所を捜しました。そんな苦労も今は良い思い出です。南極観測では、オゾンホール形成に南極特有の成層圏エアロゾルが関与していることを突き止める仕事ができ肩の荷が下りました。後に永田 武先生に会った時に、少し誉めて貰いあの賭けはかけておいて良かったと思ったものです。

少し黄砂研究に触れます。黄砂は、名古屋大学の気象・大気科学グループの長年の研究対象です。研究の切り口は時代で変わってますが、黄砂の高度分布をライダーで観測した仕事は中国でも人気があり、南極から帰って早々に中国科学院から招待状が舞い込みました。大気物理研究所、北京大学、ほかいくつもの研究機関を訪れ講演しました。その時に出迎いの労を取ってくれた石 広玉教授とは今でも良い仕事仲間で、私の所属が太陽地球環境研究所、環境学研究科と変わった後も共同で研究しています。外国の研究者がKOSAなどと書いていたりすると思わず顔がほころびます。というのは、私の論文が初めてKOSAなる言葉を登場させたと思われるからです。その後、研究の局面は大きく変わり地球温暖化問題の中で黄砂が様々に取り上げられています。ある種の感慨を覚えます。私の学生たちと石教授の学生たちが仲良く黄砂研究をしている姿を見ると夢が若い世代に引き継がれていることを実感しています。名古屋大学のよき気風が次の世代を大きく育ててくれることを期待しております。

「回想—新名誉教授のことば」では、本誌142号「平成16年度 定年退職教授のことば」（平成17年3月31日発行）に寄稿していただいた先生方のほかに、新たに名誉教授になられた先生方からいただいたことばを紹介しました。

法学研究科が国立ソウル大学校法科大学と 学術交流協定を締結

大学院法学研究科は、4月22日（金）、韓国国立ソウル大学校法科大学において、佐分同研究科長と成樂寅国立ソウル大学校法科大学長が学術交流協定書に署名し、同協定を締結しました。

国立ソウル大学校は、1946年に創立され、3つの専門大学院、1つの大学院、16の単科大学、93の研究院等からなり、約32,000名の学生を有しており、およそ23万人に及ぶ卒業生は韓国社会のあらゆる分野で指導的な役割を果たしています。また、法科大学は、比較法研究所のほか、私法学、法社会学、法史学、法と経済学、民主主義と法学、労働法学等のセクションを持ち、近年では、知的財産権、環境法等の比較的新しい分野の研究にも力を注いでいます。

同研究科と国立ソウル大学校法科大学とは、1995年に両大学の教授が中心となり東アジア行政法学会を設立して以来交流があり、最近では同研究科が昨年10月に「法と開発」に関するシンポジウムを開催した際、同学校法科大学教授が討論に参加するなど学術交流を進めてきました。

今回の協定の締結により、特に、アジア法整備支援という本学がこれまで日本の大学では先端的に取り組んできた課題に対し、同学校法科大学も、2004年以降、本格的に取

り組むことになったことから、インドシナ諸国、中央アジア諸国、モンゴル等のアジア諸国の法をめぐる研究、調査において学術交流がさらに拡充され、両大学の研究の発展につながることを期待されています。



学術交流協定締結後、握手を交わす佐分法学研究科長（右）と成樂寅国立ソウル大学校法科大学長（左）

第3回坂田・早川記念レクチャー 記念講演会開催

坂田・早川記念レクチャーの第3回記念講演会が、4月23日（土）、スーパーカミオカンデを構築し、ニュートリノ研究に革命をもたらした戸塚洋二氏（高エネルギー加速器研究機構長）を講師として、名古屋市科学館のサイエンスホールで開催されました。

このレクチャーは、本学で活躍し世界的な成果を残した



講演する戸塚氏（写真提供：名古屋市科学館）

二人の物理学者、坂田昌一、早川幸男両教授を記念し設立されたもので、21世紀を担う研究者の発掘・育成を目的としています。

講演会では、大峯理学研究科長のあいさつ、三田一郎理学研究科教授による講師選考過程の紹介の後、毎回の講師に贈られる坂田・早川記念メダルが、戸塚氏に贈呈されました。高校生約80名の参加をはじめ、参加者は310名を超え、戸塚氏の「地底から宇宙をさぐる」と題した講演の、極微の素粒子研究から宇宙へのスケールの大きな話に、若い人を中心に、これからの暗黒物質の研究や素粒子の研究についての質問が多く出され、このレクチャー制度の目的にかなった、なかなかの盛会となりました。

名大物理 COE が東京で公開講演会を開催

物理学の楽しみ－素粒子・宇宙・物質・生命－



公開講演会の様子

21世紀 COE プログラム「宇宙と物質の起源：宇宙史の物理学的解読」(ORIUM、拠点リーダー 福井康雄理学研究科教授)は、大型連休初日の4月29日(金)、東京一橋記念講堂において、名古屋大学全学同窓会の後援を得て、公開講演会と研究展示会「物理学の楽しみ－素粒子・宇宙・物質・生命－」を開催しました。

これは、同プログラムが進める宇宙・素粒子から物質・生命までの広汎な物理学の研究成果を講演会で公開するとともに、日常的な研究活動も含め、広く社会に物理学の楽しみを知ってもらおうと、同プログラムを推進する大学院理学研究科素粒子宇宙物理学専攻と物質理学専攻(物理系)の全25研究室が各々工夫を凝らし、ポスター、ディスプレイ、ビデオ、著書等を使って研究内容について展示を行い、参加者と直接対話をするという新しい試みです。

この新しい試みに対し、当日は大型連休初日にもかかわらず、400名以上の幅広い年齢層の方々の参加があり、用意したパンフレットは品切れとなり、補助いすも使用するほどの盛況となりました。また、全学同窓会、特に、関東地区の同窓生の協力もあり、子供を連れ立った同窓生や、



研究展示会の様子

同窓生である親や先生の薦めで友達と一緒に参加した学生の姿も見られました。

講演会は、拠点リーダーの福井教授による同プロジェクトの壮大なねらいと進捗状況の説明で始まり、宇宙の始まりから終末までを語る杉山 直国立天文台教授による「観測と理論が解明する宇宙の現在・過去・未来」、最新の素粒子観測 Belle 計画の成果を伝える大島隆義理学研究科教授による「素粒子の世界」、とても難解な物性理論と宇宙の関係を野球に例えてわかりやすく話す平島 大理学研究科教授による「超伝導の謎を追い」、新しい物理学の予感を熱心に説く伊藤 繁理学研究科教授による「生命を物理で探求する」と題する講演が行われ、参加者は熱心に耳をかたむけ、もっとじっくり聞きたいとの声も多く寄せられました。

講演会終了後に行われた研究展示会では、展示ブースの前で、教職員や大学院学生が、企業や他大学の方と研究内容について専門的な議論を行ったり、学生からの大学院、学部入試の相談を受けたりしていました。また、予定時間になっても若者を中心に60名以上の参加者が熱心な議論を続け、約40分延長するほどの盛況となりました。

参加者からは、先端研究はどうなっているのかという関心とともに、もっと東京で本学関係の講演を積極的に行ってほしいという要望や、別の講演会への依頼が寄せられるなど、大きな期待が感じられる会となりました。

動物ふれあい体験に300名が来場

●大学院生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設

大学院生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設(通称: 設楽フィールド)は、講演会の開催や地元行事への参加などを通じて、地域との交流や施設における教育研究の紹介を行ってきました。今年は、5月1日(日)から4日(水)まで、近隣でポニーやサラブレッドを飼育している2世帯と合同で「動物ふれあいコース in 名倉(なぐら)」を開催しました。

同施設は、ウシとヤギを飼育繁殖しており、今回の企画では牧草地の一部を囲って2~3週間前に出産したシバヤギの母仔を4組放しました。来場者は、その中でヤギの母仔に自由に触れ、仔ヤギを抱いたり母ヤギに草を食べさせたりしました。ヤギの瞳孔がネコとは逆に横長であることや、乳を飲む際に仔ヤギが激しく乳房を突き上げて乳の分泌を促進する行動等について解説すると、子供はもちろん大人でも「本当だ、知らなかった!」と感嘆の声をあげ、かわいいだけではなく、さらに興味を持ってヤギに接していました。また、畜舎のウシにも多くの人に関心を示し、施設で飼育している日本在来の「口之島牛」の由来などについて熱心に聞いていました。来場者は、天候に恵まれたこともあり、4日間で延べ101組304名にのぼり、来場者か

らは学校遠足でも利用したいという要請や、来年以降の開催を熱望する声が寄せられるなど大変好評でした。

なお、同企画の報告は、山地畜産実験実習施設のホームページ(<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~shitara/>)にも掲載されています。



動物ふれあい体験

高等教育研究センターがランチタイムFDを開催

高等教育研究センターは、5月10日(火)から13日(金)までの4日間、第1回ランチタイムFD*を開催しました。

このFDは、本学での教育経験が少ない若手教員、最近の学生の対応に困っているベテラン教員及び非常勤で授業を受け持つ機会のある大学院学生を対象に、ランチタイムの短い時間(12時10分からの40分間)を活用して授業改善のコツとノウハウを効果的に提供・共有することを目的として実施されたものです。また、コーヒーやスナックを用意し、昼食の持ち込みも可能とし、サロニックな雰囲気の中で授業改善に有益な情報提供と自由な意見交換を目指しています。

今回は、10日「なぜ授業改善が求められているのか」(夏目達也同センター教授)、11日「学生がより学ぶための授業の方法」(中井俊樹同センター助教授)、12日「学生の学習を支援するシラバスをつくらう」(中島英博同センター助手)、13日「学生は何を求めているか?」(近田政博同センター助教授)の4つのテーマで行われ、4つのテーマ通しての参加だけでなく、関心のあるテーマだけの参加も可能としました。様々な部局から教員、大学院学生延べ50名の参加があり、授業改善のコツやノウハウをつかめたと好

評でした。

なお、高等教育研究センターでは、今回のFDが好評だったことから、今秋に再度の開催を検討しています。

*FDとは、ファカルティ・ディベロプメントの略で、日本の大学では教育改善のための組織的取り組みを指す言葉として用いられています。



サンドイッチをつまみながらの研修風景(5月13日)

中学生のためのネイチャーウォッチング開催

●博物館

博物館は、5月7日（土）、知多半島のつぶてがうら礫ヶ浦海岸で、第6回「中学生のためのネイチャーウォッチング」を開催しました。

ネイチャーウォッチングは、博物館が創設以来毎年、本学の地域連携事業の一環として実施しているもので、今回は、定員をはるかに超す応募があったため、先着順に45名を選びました（不参加2名）。また、附属高校生3名がチューターとして参加し、附属学校教諭も1名同行しました。

出発時にはまだ雨が残っていましたが、到着時には晴れ渡り、早速、西川輝昭博物館教授の引率で、海岸に出て生物を実際に手に取って観察しました。昼食後には、足立博物館長の指導で化石探しに挑戦しました。ゴーグルをつけ、海辺の石をハンマーで叩くと、貝やウニの化石が見つかりました。潮の引きが予想外に悪かったため、よい石になかなかめぐりあえない人もいましたが、足立館長からコツを伝授され、参加者はあきらめずに挑戦していました。

高校生チューターは初めての試みでしたが、前日に事前学習を実施する等の準備を整えたこともあり、参加者には好評でした。博物館では、このような形の中高大連携を今後さらに発展させていく予定です。



足立博物館長から説明を受ける参加者

博物館第39回特別講演会開催

博物館は、現在公開中の第8回特別展「時を測る」の関連行事として、5月12日（木）、第39回特別講演会「弥生時代はいつ始まったのか」を開催し、市民や本学の学生等、約80名の参加がありました。

講師の山本直人文学研究科教授は、遺跡から出土した考



講演する山本文学研究科教授

古学資料の年代測定研究に数多く携わっており、特別展の「縄文時代と弥生時代の境界は？」と「古墳時代の始まりは？」のコーナーに展示されている土器の年代研究も行っています。講演で、山本教授は、まず従来の定説では弥生時代の開始年代がいつ頃と考えられ、それがどう決められていたのかを紹介した後、新たに弥生土器に付いた炭化物を炭素14年代測定法で年代測定することにより、定説がどのように変わったのかを解説しました。また、日本の年代測定研究の中心である本学で行われている様々な遺跡出土資料の年代研究についても説明がありました。講演後の質疑応答では、会場から多くの質問が出され、活発な意見交換が行われました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
1 「外国人研究者の立場から日本のまちづくりに提言したい」と諭仲乾・客員研究員は瀬戸市の地場産業復興に期待	4.16 (土)	中日 (夕刊)
2 訃報：桐原朝夫・本学名誉教授	4.17 (日)	朝日 (朝刊) 他2社
3 愛知工業大学の特別講座「21世紀・万博大学」第2回目で、理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授が「ノーベル化学賞への道」と題して講演	4.17 (日)	読売 中日 (朝刊)
4 教育の森：中学校教科書検定「発展的学習」について検証 浪川幸彦・多元数理科学研究科教授は「時間数が同じなら詰め込みになるだけ」と話す	4.18 (月)	毎日 (朝刊)
5 数理ウェブ：日本数学コンクールのフォローアップセミナー23日開催	4.18 (月)	中日 (朝刊)
6 名大サロンの主役：西川輝昭・博物館教授 ホヤと生物の進化について	4.19 (火)	中日 (朝刊)
7 名城大学理工学部教授・赤崎勇・本学特別教授の業績をたたえ、2001年に豊田講堂の時計台の文字盤と針がLED化されたのに続き、名城大天白キャンパスの正門にLED時計塔が完成	4.19 (火)	中日 (朝刊)
8 中部経済産業局は2005年度から産業クラスター計画「東海ものづくり創生プロジェクト」の活動を再強化 推進組織の東海ものづくり創生協議会(会長・平野眞一総長)は域内の産学官約5機関と新たに交流を図る	4.20 (水)	日刊工業
9 アメリカ国際開発庁のウィリアム・ガーヴァリンク民主化・紛争・人道援助局局長代理が18日本学で講演 スマトラ沖地震への人道復興支援について説明	4.20 (水)	朝日 (朝刊)
10 名古屋市長選：20歳代の関心、どうしたら…：小野耕二・法学研究科教授コメント「普段若者が市民としての意識を持てる機会を市がつくってこなかったことの裏返し」	4.20 (水)	読売
11 愛知診断技術振興財団は新しい検診キット「ジェイ・ドット」開発 山内一信・医学系研究科教授は「生活習慣病の原因究明や予防に大いに役立つ」と話す	4.20 (水)	読売
12 訃報：加賀秀雄・本学名誉教授	4.20 (水)	中日 (朝刊) 他2社
13 叙位叙勲：正四位瑞宝中綬章 坂本順・本学名誉教授	4.20 (水)	中日 (朝刊)
14 家族の作品を一堂に集めた展覧会「いま×5」開催 染色作家・木方阿里さん、夫の木方洋二・本学名誉教授、長男で建築学を学ぶ十根さん、次男の彫刻家立樹さん、立樹さんの妻で彫刻家の千春さんの5人が出展	4.20 (水)	中日 (朝刊)
15 5月1日のコンサート「今こそ平和のうたを」に本学男声合唱団OBの有志がボランティアで出演、反戦歌を熱唱	4.20 (水)	中日 (朝刊)
16 広がる産学官連携：本学は「名古屋大学協力会」を設立予定 法人会員1000社を目指す	4.21 (木)	日刊工業
17 愛知万博フォーラム「環境本位型社会を目指して—21世紀の科学のあり方」5月21日に豊田講堂で開催	4.22 (金)	朝日 (朝刊)
18 子どもの食物アレルギーの講演会24日開催 広瀬泉・医学部附属病院医師が話す	4.22 (金)	朝日 (朝刊)
19 科学技術交流財団(理事長・松尾稔・本学名誉教授)は研究会事業で2005年度に14の研究会を新設、4月末にスタートすると発表	4.22 (金)	日刊工業
20 日本外科学会で人工臓器など公式プログラムの一部を初めて一般公開 会長の二村雄次・医学系研究科教授に聞く「開かれた外科学会に」	4.23 (土)	中日 (朝刊)
21 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム『21世紀の創造』の愛知万博セッション「私たちの未来を見つめて—地球環境と科学」が5月15日開催 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授ら参加	4.23 (土)	読売
22 航空部(部長・中村佳朗・工学研究科教授)が購入した新鋭グライダー(ASK21)の命名式開催「遙」と命名	4.24 (日)	朝日 (朝刊)
23 公開講座「21世紀をすこやかに生きる予防教室」5月から 総合指導に島岡清・総合保健体育科学センター教授ほか	4.24 (日)	中日 (朝刊)
24 名古屋市長選 投票率20%台 市民の関心低く「残念」：小野耕二・法学研究科教授コメント「市民が白けた」	4.25 (月)	読売
25 特集「医療相談」：「胃下垂と診断。不快感がある。」との問いに、後藤秀実・医学系研究科教授は「暴飲暴食などを避け、胃の負担減らして」と答える	4.26 (火)	読売
26 訃報：加藤雄一・本学名誉教授	4.26 (火)	中日 (朝刊) 他2社
27 学生街ダンス：英国で大学院留学 漆畑祐佳さん・本学大学院生	4.26 (火)	中日 (朝刊)
28 21世紀 COE プログラム ORIUIM 公開講演会「物理学の楽しみ—素粒子・宇宙・物質・生命—」29日開催	4.26 (火)	中日 (夕刊)
29 中国・上海に11月、海外事務所を開設へ 平野眞一総長は「反日デモなどはあるが、個人のレベルで友情を結び、互いに理解していくことが重要」と話す	4.27 (水)	毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
30 26日、病院・施設整備・環境安全関係担当理事に前医学系研究科長の杉浦康夫氏、財務・広報関係担当理事に前文化庁宗務課長の豊田三郎氏が就任したと発表	4.27 (水)	中日 (朝刊)
31 26日、農学部を来年度から現在の2学科から3学科(生物環境科学、資源生物科学、応用生命科学)に改編すると発表	4.27 (水)	中日 (朝刊) 読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
32 5月29日に日本リウマチ協会愛知支部大会開催 石黒直樹・医学系研究科教授が「新しいリウマチの薬物治療」と題して講演	4.29 (金)	中日 (朝刊)
33 2005年春の叙勲 瑞宝中綬章：上田倣完・本学名誉教授、三枝孝弘・本学名誉教授 清水祥一・本学名誉教授 堀井憲爾・本学名誉教授	4.29 (金)	毎日 (朝刊) 他4社
34 なごや東西南北ストーリー：「なごや環境大学」柳下正治・環境学研究科客員教授とNPO 法人パートナーシップ・サポートセンター代表理事・岸田眞代さんの対談	4.30 (土)	毎日 (朝刊)
35 医学部附属病院の脳死肝移植患者退院 感謝の心忘れず生きる	5. 1 (日)	中日 (朝刊)
36 備える：ハザードマップ 鈴木康弘・災害対策室長「マップを使い込み、更新していく姿勢が必要」と強調	5. 1 (日)	中日 (朝刊)
37 第58回中日文化賞 近藤孝男・理学研究科教授、二村雄次・医学系研究科教授受賞	5. 3 (火)	中日 (朝刊)
38 2005年度科学技術分野の文部科学大臣表彰・科学技術賞決定 本学からは、高木直史・情報科学研究科教授、福田敏男・工学研究科教授が受賞	5. 3 (火)	日刊工業
39 談論：会社とは何か 従業員抜きの経営はない 伊藤忠商事株式会社取締役会長・丹羽宇一郎・全学同窓会副会長	5. 3 (火)	読売
40 平和・貧困問題の授業の中で平和メッセージ集づくり 「25年後の自分への平和のメッセージ」を学生らが公募、夏に本にまとめて出版へ	5. 6 (金)	朝日 (夕刊)
41 「愛・地球会議」フォーラム6月2日開催 パネル討論に平野眞一総長ら	5. 9 (月)	日経 (朝刊)
42 日本気象学会の2005年度春季大会公開シンポジウム「地球環境の進化と気候変動」を15日に開催 安成哲三・地球水循環研究センター教授ら基調講演	5. 9 (月)	日刊工業
43 博物館第8回特別展「時を測る—地球誕生から中世まで」7月31日まで開催中 最新の年代測定装置など紹介	5.10 (火)	中日 (朝刊)
44 名古屋市環境審議会 (会長・紙野健二・法学研究科教授) は9日、市の環境基本計画の見直しと、環境基本条例に基づく大気や水質の環境目標値の設定について答申	5.10 (火)	朝日 (朝刊)
45 文部科学省「大学国際戦略本部強化事業」の採択大学に本学など20件を決定	5.10 (火)	日刊工業
46 公開講座「阪神・中越大震災に学び東海・東南海地震に備える」17日開催 講師に福和伸夫・環境学研究科教授	5.10 (火)	中日 (朝刊)
47 学力は低下したか：基礎の上に「考える力」を 浪川幸彦・多元数理科学研究科教授	5.10 (火)	中日 (朝刊)
48 名古屋歴史科学研究会大会 池内敏・文学研究科教授らの研究発表	5.10 (火)	中日 (夕刊)
49 愛知県の看護功労者に田口昭子さん・医学部附属病院看護師ら40人表彰	5.11 (水)	中日 (朝刊)
50 修正される「成果主義賃金」 個々人の伸び生かす評価を 太田聡一・経済学研究科教授	5.11 (水)	朝日 (夕刊)
51 日本外科学会 (会長・二村雄次・医学系研究科教授) の第105回定期学術集会在11日に開幕	5.11 (水)	中日 (夕刊)
52 老年学：医療の職場に満足感を 井口昭久・医学系研究科教授	5.12 (木)	朝日 (朝刊)
53 井口昭久・医学系研究科教授にこれからの介護のあり方を聞く 「自分らしく、いかに生きるか」	5.12 (木)	読売
54 医学部の外科の歴史をたどる特別企画展「名古屋大学第一外科のあゆみ」13日まで開催	5.13 (金)	中日 (朝刊)
55 愛知県教育委員会は12日、全日制課程の推薦入試と障害者の選抜方法のあり方について、県公立高校入学者選抜方法協議会議 (議長・村上隆・教育発達科学研究科教授) に諮問	5.13 (金)	朝日 (朝刊) 読売
56 東海地方4月の地震 林能成・災害対策室助手	5.13 (金)	読売
57 名古屋大学交響楽団第88回定期演奏会 15日開催	5.13 (金)	日経 (夕刊)
58 留学生は見た！おらがパビリオン：ディーピカ・カウシクさん・本学学生の見たインド館 印象的な菩提樹の部屋	5.14 (土)	毎日 (朝刊)
59 叙位叙勲：従四位瑞宝中綬章 桐原朝夫・本学名誉教授	5.14 (土)	中日 (朝刊)
60 公開講座「大気から見る地球環境～人類誕生から現在の名古屋」21日開催 講師は甲斐憲次・環境学研究科教授	5.14 (土)	中日 (朝刊)

万博記念国際フォーラム (IFSS-Nagoya 05)

Nagoya University International Forum for a Sustainable Society

– In Collaboration with EXPO 2005 AICHI JAPAN –

「21世紀の環境調和型持続可能社会構築に向けて」を基調テーマに、諸外国から招待した環境・エネルギー、材料、生命、環境経済、環境法等の各分野の研究者と、国内の著名な研究者による討論を行い、21世紀の人類が直面する問題点・課題を摘出し、その解決の道を提言します。

なお、このフォーラムは、同時通訳付きで一般市民も自由に参加できます。

日 時：平成17年8月7日（日） 9：30～20：30

会 場：名古屋大学豊田講堂

主 催：万博記念国際フォーラム組織委員会（名古屋大学、2005年日本博覧会協会、愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所、(社)中部経済連合会、(財)科学技術交流財団、(財)名古屋都市産業振興公社、(財)名古屋産業科学研究所）

[プログラム]

9：30～9：45 開会の挨拶
平野 眞一（万博記念国際フォーラム組織委員長・名古屋大学総長）
来賓の挨拶
豊田 章一郎（日本国際博覧会協会会長）

第Ⅰ部 講演：持続可能社会へのいざない

9：45～10：35 SACHS, Wolfgang (Wuppertal Institute, Germany)
ヴッパータール研究所上席研究員：地球文明の未来学の立場から持続可能な地球環境の創生について語って頂く。
10：35～11：25 SEREBROV, Aleksandr (All-Russia Aerospace Society, Russia)
ロシアの元宇宙飛行士：宇宙から見た地球環境と持続可能な未来の人類社会について語って頂く。
11：25～12：15 中村 桂子 (JT 生命誌研究館)
JT 生命誌研究館長：生命誌を中心とした人間社会と自然・環境との関係について語って頂く。

第Ⅱ部 講演：循環型社会へのみちのり

13：30～14：20 石丸 典生 (株)デンソー
(株)デンソーの特別顧問：科学・技術の開発による地域産業の持続的発展と環境との調和について語って頂く。
14：20～15：10 SCHIPPER, Lee (World Resources Institute, USA)
WRIの主任研究員：エネルギー・地球温暖化問題を克服する立場からアジアの交通とインフラ整備について語って頂く。

第Ⅲ部 パネル討論：持続可能な循環型社会

15：30～17：00 コーディネーター：平野 次郎 (放送ジャーナリスト)
上記の第Ⅰ部、第Ⅱ部の講演者をパネリストに迎え、持続可能な循環型社会創成のために人類が抱えている課題と方策について討論を行う。
17：00～17：05 閉会の挨拶
松井 恒雄 (万博記念国際フォーラム実行委員長・エコトピア科学研究所長)

第Ⅳ部 フォーラムの夕べ (懇親会)

18：30～20：30 名古屋東急ホテル

問い合わせ先：万博記念国際フォーラム事務局（エコトピア科学研究所事務室内）
TEL 052-789-5263 E-mail ifss@esi.nagoya-u.ac.jp



第1回 AC21学生世界フォーラム2005

国際学術コンソーシアム (Academic Consortium 21: AC21) は、7月29日(金)～8月8日(月)、野依記念学術交流館、大学院生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設(通称: 設楽フィールド)や愛知万博会場等で、「AC21学生世界フォーラム2005」を開催します。

AC21は、2002年6月24日に開催された名古屋大学国際フォーラムにおいて、高等教育の発展のためにグローバルなレベルでの相互協力を一層促進し、国際社会や地域社会に貢献するために設立されました。AC21メンバー(25機関)及びAC21パートナー(5機関)が教育・研究の発展のために、国際インターンシップ、ベンチマーキング、教職員・学生交流等の諸活動を通じて、世界の異なる地域社会の架け橋となることを目的としています。

AC21学生世界フォーラムは、2年毎に開催され、AC21メンバー機関から各1名、計25名(今回、15名が応募)の学生が国際的なテーマ・問題(環境、政治、経済等)について議論・意見交換できる場を提供します。

【主催】 AC21、名古屋大学

【メインテーマ】 「The Coexistence of Nature and Humans」(人間と自然の共存)

- 【目的】**
- a. 経験の共有や意見交換を通じて、学生の国際的な問題についての理解を深める
 - b. 議論されたトピックに関連する新しいアイデア及びイニシアティブを促進する
 - c. 学生が互いの友情を深めて偏見障壁を克服するような新しい関係を構築する機会を提供する
 - d. グローバルに物事を考え、行動する「きっかけ」を提供する
 - e. AC21ネットワークの強化

【形式】 ワークショップ、講演会、メインフォーラム、フィールドトリップ等

愛・地球博にあわせて開催し、AC21メンバー機関の学生代表各1名ずつが参加する

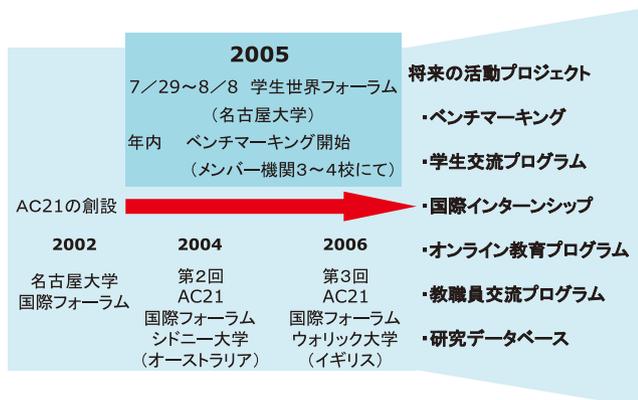
- 【募集】**
1. 当フォーラムに向けての準備やフォーラム当日の参加者へのサポートをするボランティアスタッフ(学生)を募集しています。
 2. 8月6日(土)に行うメインエキシビション(野依記念学術交流館1F)にはどなたにも参加いただけます。

【問い合わせ先】 AC21推進室

TEL 052-789-5684 / 052-788-6122 URL <http://www.ac21.org>

E-mail office@ac21.org

AC21活動スケジュール



AC21学生世界フォーラム アジェンダ(仮)

- 7月29日～30日.....学生到着
- 7月31日.....ウェルカムランチ、キャンパスツアー
トピック毎にチーム分け
- 8月1日.....愛・地球博に参加
世界を取り巻く環境についての学習
- 8月2日～3日.....大学院生命農学研究科附属山地畜産
実験実習施設にて
課外学習、講義、ディスカッション、
メインエキシビションに向けての準備
- 8月4日.....トヨタ工場、トヨタ会館見学
企業の環境対策についての学習
メインエキシビションに向けての準備
- 8月5日.....名古屋市内ツアー
地域の環境政策についての学習
メインエキシビションに向けての準備
- 8月6日.....メインエキシビション**
プレゼンテーション、ディスカッション
- 8月7日.....万博記念国際フォーラムに参加
- 8月8日.....学生帰国

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月23日(水)～7月31日(日)

場 所：博物館
開館時間：10時～16時
休 館 日：月・火曜日
ただし祝休日は開館
入 場 料：無料

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第8回名古屋大学博物館特別展

テ ー マ：時を測る—地球誕生から中世まで—



6月17日(金)～7月8日(金)

場 所：中央図書館4階展示室
時 間：10時～17時
休 館 日：6月23日(木)

[問い合わせ先]
附属図書館情報管理課庶務掛
052-789-3667

附属図書館2005年企画展

テ ー マ：説話（はなし）の書物—小林文庫本を中心に—



6月30日(木)

場 所：博物館講義室
時 間：15時～

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第41回名古屋大学博物館特別講演会

講 師：水垣柱子（産業技術総合研究所）
演 題：どこにでもある電子が時を刻む

7月2日(土)

場 所：中央図書館5階多目的室
時 間：13時～15時

[問い合わせ先]
附属図書館情報管理課庶務掛
052-789-3667

附属図書館2005年企画展 ギャラリートーク

テ ー マ：説話集、その豊穡なる世界
口 演：渡辺信和（同朋大学）、阿部泰郎（名古屋大学）

7月26日(火)

場 所：高等総合研究館カンファレンスホール
時 間：17時～

[問い合わせ先]
研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051

第10回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：鮎京正訓法政国際教育協力研究センター教授（高等研究院流動教員）
「アジア諸国に対する法整備支援」（仮題）
講演者Ⅱ：松原隆彦理学研究科助教（高等研究院流動教員）
「宇宙の構造から宇宙の起源を探る」（仮題）

8月6日(土)、8月7日(日)

時 間：10時～16時
（2日間同一コースを受講）
場 所：生物機能開発利用研究センター
対 象：社会人、学生（高校生以上）
合計15名（応募多数の場合は
抽選により受講者約15名を決
定し7月15日頃に通知）

受 講 料：3,000円
（保険料 500円、テキスト代 2,500円）
申込締め切り：7月8日（金）

[問い合わせ先]
生物機能開発利用研究センター公開実験講
座2005係
052-789-5194

生物機能開発利用研究センター公開実験講座2005

テ ー マ：バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する
趣 旨：最先端かつ魅力的な課題の実験コースを受講することによっ
て、現代生物学についての知識を身につけてもらう
コ ー ス：1 DNA で見るメダカの地域差
2 自分の遺伝子を見てみよう
3 コメの食味とDNA

URL <http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/%7enums/shakai.html>



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月6日(土)～10月7日(金)

場 所：博物館

開館時間：10時～16時

休 館 日：土・日曜日、祝休日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第6回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：核分裂絵巻



8月14日(日)

場 所：IB電子情報館

(他に三重・大阪でも実施)

時 間：10時～16時30分

参加資格：高校生、ジュニアは中学生が対象

(小学生は5年生以上)

参 加 料：1,000円

申込手続：6月下旬に要項が出来る予定

以降応募を開始

(ハガキによる申込)

[問い合わせ先]

研究協力・国際部社会連携課

052-788-6144

第16回数学コンクール・第9回ジュニア数学コンクール

第6回数学コンクール論文賞

応募要項に出題する問題に対し、論文(個人又は共著)を受け付ける(8月末日)

※終了後に採点を行い、各コンクールの優秀者には11月3日(祝)の表彰式において
賞状及び記念品を贈呈する

名大トピックス No.145 平成17年6月15日発行

編集・発行/名古屋大学広報委員会

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-789-2019 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

初夏の東山キャンパス
を彩るツツジと豊田講
堂



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

38 第1回名大祭

2005(平成17)年6月、名古屋大学では恒例の名大祭(テーマ:道草)が6/2(木)から6/5(日)の4日間にわたって開催されました。

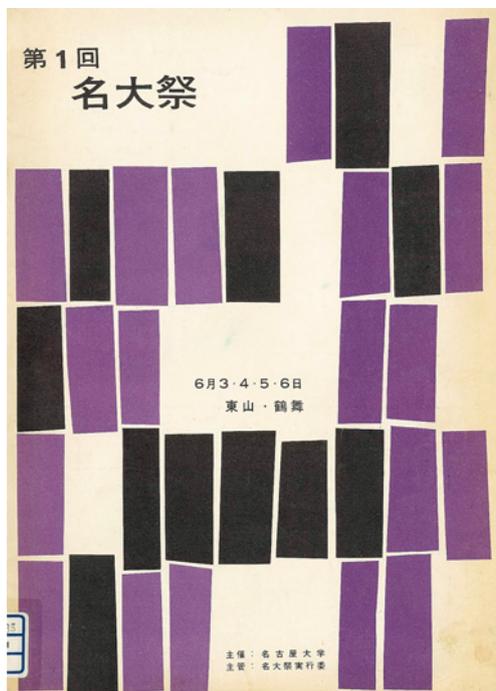
さて、例年6月初旬に開催されるという点で全国的にも珍しい大学祭の一つである名大祭ですが、その記念すべき第1回が開催されたのは1960(昭和35)年のことでした。以下、大学文書資料室が保管している第1回名大祭プログラム冊子(全28頁)を素材に、45年前の名大祭の姿を紹介していきます。

名古屋大学主催・名大祭実行委員会主管という形で開催された第1回名大祭は、東山・鶴舞の両キャンパスを主会場とする「名古屋大学史上初のフェスティバル」と位置づけられ、学内には名大祭誕生に対する喜びと期待が満ちていたと思われます。こうした喜びや期待の背景には、少なくとも二つの要因がありました。一つは、「たこ足大学」ともいわれていた本学において、それまで市内各所に分散

していた部局の東山地区集結が進むとともに、豊田講堂の完成(1960年)によって地理的な環境の改善が図られたことです。もう一つは、「60年安保条約改定」問題(1958~59年)や伊勢湾台風被災者への救援活動(1959年)などによって、「学生運動」が盛り上がりを見せていたことです。

以上のような時代背景のもとで開催された第1回名大祭では、「日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて—日本人民の歴史づくりのために—」という基本テーマが掲げられ、全学的な規模での講演会・討論会・シンポジウムをはじめとして、各学部展示会・施設公開、医学部祭、自治会・サークルなどが主催する研究発表、音楽・演劇・舞踊の各公演が期間中に数多く開催されました。

なお、第1回名大祭プログラム冊子の催し物案内には、「キャンプ村開設」(6月3・4・5日/東山一带)という項目が掲載されており、東山キャンパス整備・拡充期ならではの行事が行われている点も興味深いです。



■キャンプ村
東山は絶好のキャンプ地である。集まって、青春をうたおうではないか。学生のファイトと集団生活の素晴らしさを御覧あれ。



1	2	3
	4	

- 1 第1回名大祭プログラム
- 2 名大祭会場案内
- 3 「キャンプ村開設」案内
- 4 第1回名大祭開催当時の東山キャンパス